

平成15年の穂いもち多発生
(3)施肥管理といもち病の発生

古川農業試験場

1 取り上げた理由

平成15年のいもち病発生，特に穂いもち発生には基肥窒素量や稲体指数，復元田における土壌窒素量の影響が認められたので，今後の施肥管理のための参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 基肥窒素量と穂いもちの発生状況を比較した場合，基肥窒素量が多いほど穂いもちは多発した(図1)。
- 2) イネの植生指数(NDVI)と穂いもち発生には高い相関が認められ，植生指数が大きいほど穂いもちは多発した(図2)。
- 3) 転作後の復元後年数と穂いもちの発生状況を比較した場合，同一地域の同一防除体系の場合，復元後年数が短いほど穂いもちは多発した(図3)。

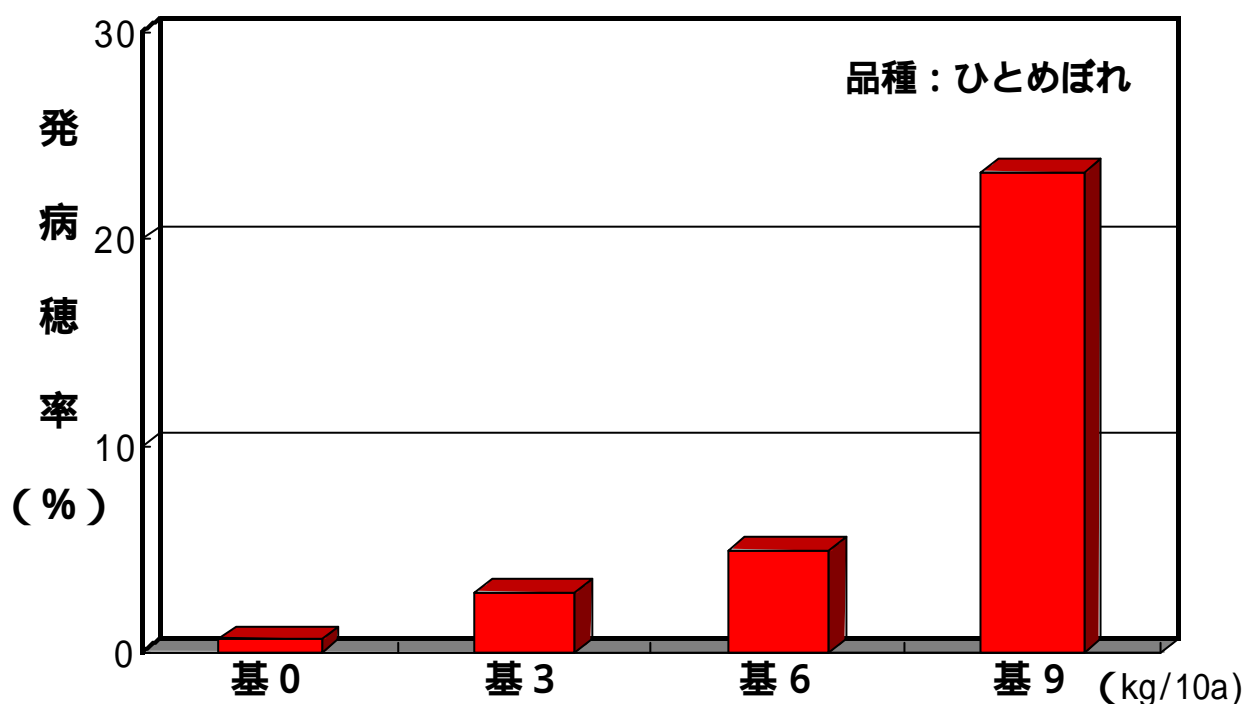


図1 基肥窒素量と穂いもち発生状況

3 利活用の留意点

- 1) 施肥管理による穂いもち発生量の差異には，減数分裂期の低温回避や障害不稔の軽減が大きく影響していると考えられる。
- 2) 復元田では，いもち病防除を徹底するとともに基肥量減や品種などで対応する。また，その後も適切な施肥管理を実施する。

(問い合わせ先：古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

平成16年4月作成

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

- a みやぎの環境に優しい農産物栽培技術体系の確立 - 水稲編 - (期) : 平成 1 5 年
- b 水稲・大豆・麦を基幹とした大規模水田輪作技術の組み立て実証 : 平成 1 5 年 ほか

2) 参考データ

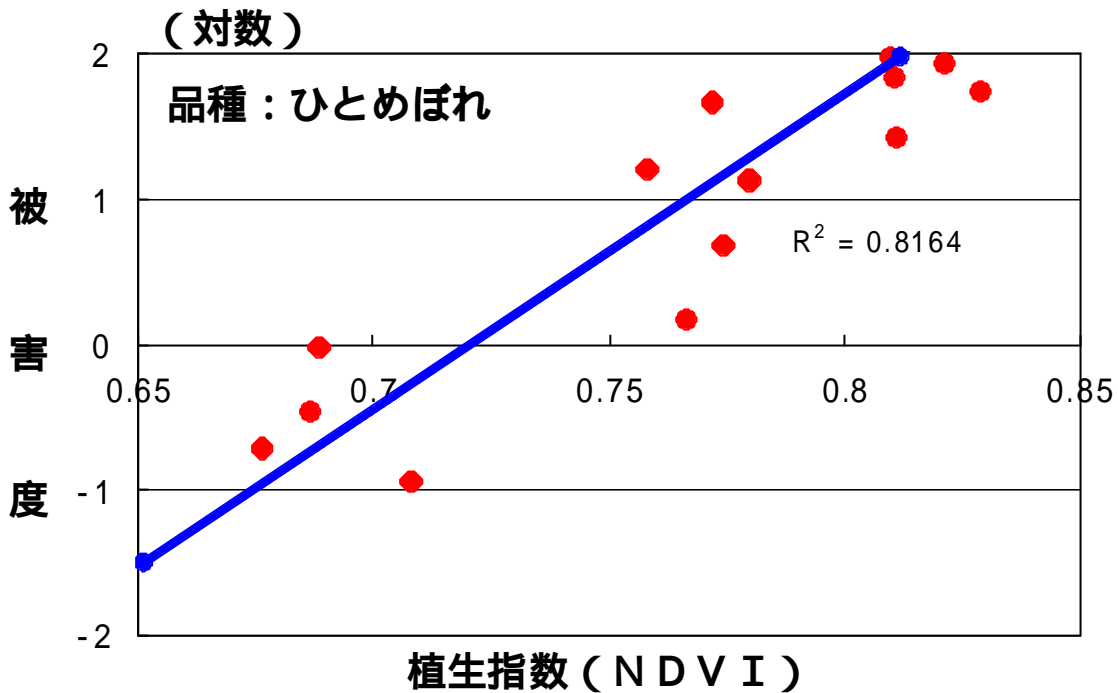


図2 幼穂形成期頃の植生指数と穂いもち被害度の関係

注)NDVIは稲の生育状態、栄養状態を表す指数。稲の窒素吸収量と相関が認められる。

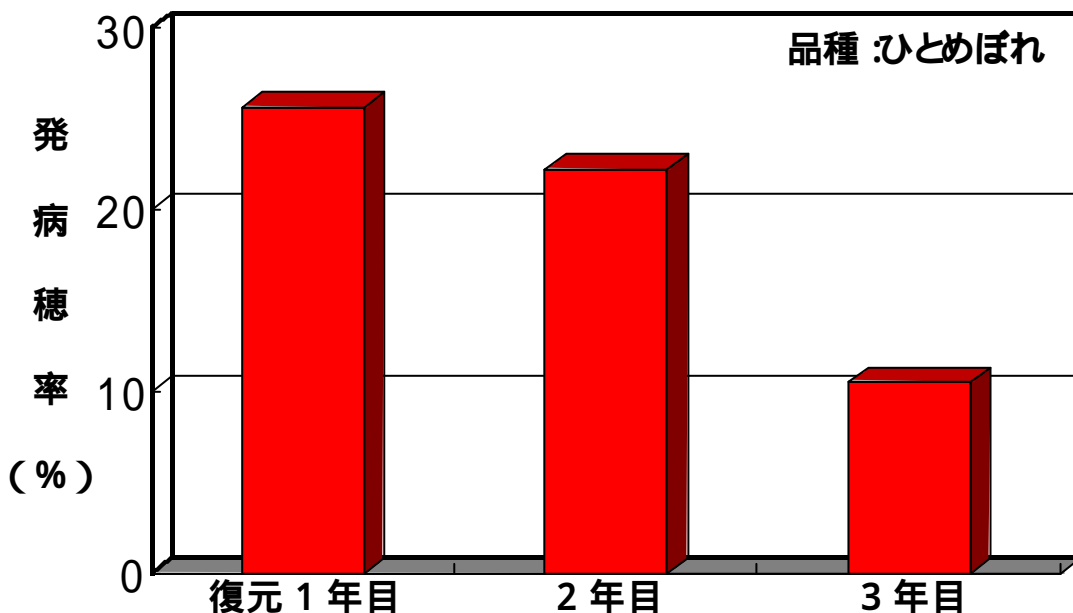


図3 復元田での復元後年数と穂いもちの発生 (平成15年)

注)同一地域内の同一防除体系の平均値

3) 発表論文等
特になし